

日本グループ・ダイナミクス学会会報

GDA

# ぐるだい ニュース

The Japanese Group Dynamics Association

<http://www.groupdynamics.gr.jp/>

## 第 54 号

(2018 年 12 月 13 日)

発行所：立正大学心理学部 西田公昭研究室

日本グループ・ダイナミクス学会

E-mail：[sec-general@groupdynamics.gr.jp](mailto:sec-general@groupdynamics.gr.jp)

発行人：西田公昭 編集担当：杉浦淳吉

## 目次

★★★ 名誉会員の推戴を受けて ★★★	1
★★★ 日本グループ・ダイナミクス学会 第 65 回大会後記 ★★★	3
★★★ 第 65 回大会参加記 ★★★	4
★★★ コラボ・リクエスト企画を振り返って ★★★	6
★★★ 2017 年度 優秀論文賞 ★★★	9
★★★ 2018 年度 優秀学会発表賞 ★★★	12
★★★ 国際学会大会参加記 ★★★	18
★★★ 事務局からのお知らせ ★★★	21
★★★ グルダイ学会関係連絡先 ★★★	23

---

### ★★★ 名誉会員の推戴を受けて ★★★

---

大坊郁夫 (北星学園大学・短期大学部)

1972 年、別の学会大会での私の発表をお聞きいただいた白樫三四郎先生からお誘いをいただいたのがきっかけで本学会に 1973 年に入会いたしました。爾来 45 年、長い時間が経ちました。当時は、大抵の学会大会開催地からは遠いところに住んでおりましたが、できるだけ参加するようにいたしました。このような「若手」に関心を持たれた故と思いますが、三隅二不二先生 (会長)

からは、教え子でもないにもかかわらず「大坊くん」とよく声をかけていただきましたので、私もできるだけ参加しようと思った覚えがあります。

当時は、人財育成、社会調査、広告関連の企業の方も多く参加されていたのも大きな特徴でありました。このことには、三隅先生の実践的な影響力も大きなものだったと思います。

若い会員の方はおそらくあまりご存知ないでしょうが、この学会では、地方区選出の理事は、地区別に研究（勉強）会を担当することになっていました。正確ではありませんが、1988年1月以降、札幌でよく研究会を行いました。多くは北大の篠塚博美先生の研究室を会場とし、北海道社会心理学研究会と称していました。山岸俊男先生、そして北大の院生が中心でした。実験社会心理学研究の論文の合評会や、各自の研究の発表会などです。終わってからは、篠塚先生の手料理でワインをよく飲んだものです（ぐるだいニュース0号、1992年7月号に紹介）。このような地区ごとの研究会、合評会は、各地区でよく催され、「ぐるだいニュース」に紹介されていました。ですが、類する研究会が各処で行われるようになった故でしょうか、その後急速に廃れたようです。議論噴出の頃を懐かしく思い出します。

1993年、熊本大学での第41回大会時には、学会の諸規程が大幅に改定され、会長、理事選出の仕方がほぼ現行のものとなりました。特に、理事の任期、選出の仕方として、一部に年齢の枠を設定した（40歳以下）ことは、当時としては驚天動地のこととして捉えた人は少なくなかったかも知れません（この年齢枠は25年を経て、今年の大会で廃止されるとの由、会員の人数規模の減少、年齢構成の変化などによる賢明な判断だと思えます）。翌年、理事の大幅な交代があり、それまで20年間会長を務められた三隅先生の後任として杉万俊夫先生が会長となりました。その後、本学会としてアジア社会心理学会の発足（1995年に香港にて設立の大会が開催）にかかわり、皆さんのご承知の *Asian Journal of Social Psychology (AJSP)* の発行、編集、販売に関わるようになりました（1998年—2014年までは共同刊行、後には、*Progress in Asian Social Psychology* の編集も）。

これは本学会の念願であった国際提携の始まりであり、関わる者の気概に富むものでありました。同時に、それまで個人の「献身」をあてにしていた学会の諸事務を外に委託することにもなりました。当然のことながら財政的には厳しくなり、今日に続く学会費の値上げ（院生会員については軽減化）をせざるを得ませんでした。常任理事会では、財政のことでは大いに苦労したものです。なお、当時、大いに検討しながらその後立ち消えになったこととして、「集団指導士」資格、「実践会員」（企業人の学会への参加を促す）がありました。いずれも学会のさらなる活性化を目指した熱い議論が繰り返された時代です。

1998年には会長として学会に関わることとなりました（その期の常任理事は、鹿内啓子、外山みどり、橋口捷久、堀毛一也、村田光二、山岸俊男；敬称略）。今でこそ、学会の財政にゆとりがでたのではないかと思います。当時は、極端な表現をするならば、「爪に火をともし」ような「節約生活」でした。文字通りのアカデミック・ボランティアとして貢献していただいた役員、事務局、院生の方々には今更ながら感謝いたします。

三隅先生からの多額のご寄付をベースにした三隅賞を設け、AASP および本学会からの審査者による AJSP 掲載の優秀論文の表彰制度がスタートしたのもこの年からでした。1999年、台北で開催された AASP 第3回大会にてその第1回の表彰（山口 勸先生が受賞者）が行われました。そ

れから 20 年経ち、2019 年の AASP 第 13 回大会が台北で開催されます。月日は巡ると今更ながら実感します。

2009 年には、1986 年以来、23 年ぶりに JGDA56 回大会と日本社会心理学会第 50 回大会との合同大会を開催いたしました（大阪大学吹田キャンパス、会期は 3 日間）。

AASP の Ng 会長、USA の Kenneth Gergen 先生、韓国の社会・犯罪心理学の趙恩慶先生などをお招きし、両学会そして海外との交流で大賑わいでした（参加者は 900 名強）。この規模の大会運営は並大抵のことではなく、大阪大学の対人社会心理学研究室の OB、OG、院生、学部生総出の献身あってのこと、人のつながりの大事さを痛感するものでありました。

このように振り返ってみますと、学会に関わることは、人とのつながりに浸かることであり、誰彼の世話に甘んじることに外なりません。ぜひ、多くの会員がそれぞれの役割を担い、学会として先輩から受け継いだ資産を継承して欲しいと念じています。今後とも、充実した活動ができれば続けることを長らく会員であった者として期待しています。

名誉会員の推戴をいただきましたことに感謝いたします。 (2018 年 11 月 13 日)

---

---

## ☆☆☆ 日本グループ・ダイナミクス学会 第 65 回大会後記 ☆☆☆

---

---

大会準備委員長  
大坪庸介 (神戸大学)

日本グループ・ダイナミクス学会第 65 回大会を、9 月 8 日・9 日の二日間にわたり神戸大学文学部で開催することができました。本来であれば、「秋のさわやかな・・・」といった表現を使いたいところですが、関西での大きな台風、北海道での震災の直後で、必ずしも学会開催にふさわしいとは言えない時期での開催となりました。また、当日の神戸市には大雨警報も出ており、いったいどれくらいの方にご参加いただけるのか気をもんでおりましたが、最終的には 157 名の皆様にご参加いただくことができ、準備委員一同胸をなでおろしました。

このような悪条件にもかかわらず、今大会では多くの方からお力添えをいただき、いくつかの新しい取り組みにも挑戦することができました。まず、理事の中島先生を中心に企画していただいたコラボ・リクエスト企画です。普段は学会に参加されない企業の方にポスター形式で研究の提案をしていただき、産学の共同研究の可能性が活発に議論されました。また、コラボ・リクエスト企画にご参加いただいたグリコ様からは、ビスコとプリッツの差し入れもいただきました。休憩室のお菓子が充実していたとご記憶の方も少なくないのではないのでしょうか。

もうひとつの新たな試みとして、兵庫県立長田高等学校の 3 組の高校生にも研究発表をしてもらいました。ポスター会場をでは、多くの先生方が足をとめて高校生の話を聞いてくださいました。終了後、発表した高校生も「参加してよかった」という感想を述べていました。高校生の発表に耳を傾け、コメントをいただいた先生方にはお礼申し上げます。

初日の夜の懇親会には、お酒の差し入れまでして下さった先生方がいらっしゃいます。温か

いお心遣いに感謝いたします。本当は大阪湾とその対岸まで含めた夜景を楽しめるはずでしたが、あいにくの天気のため、本来楽しめるはずの景色ではなかったことが残念です。しかし、外の大  
雨にも負けず、会場の各所で議論の続きや楽しい会話に花が咲いていたように思います。

大会の2日目は、浜村武先生のご講演を朝の最初のプログラムといたしました。「Big Data と文化心理学」というとても興味深いタイトルをいただいたおかげで、こちらも教室の後ろに追加の椅子を並べないといけないくらい多くの方にご参加いただきました。残念ながら最後までゆっくりと拝聴することはできませんでしたが、ご自身の最新の研究も含めたとても刺激的なご講演でした。

天候にはめぐまれませんでしたが、多くの方にご参加いただき、第65回大会を無事に終えることができました。準備委員長である私の仕事が遅かったために、大会運営は即席チームで担うことになってしまいました。そのため、不手際や失礼なことも多々あったかと思いますが、帰り際には多くの方からねぎらいのお言葉をいただきました。また、第64回大会開催にご尽力された唐沢かおり先生・村本由紀子先生からは、大会の運営に関して多くのご助言をいただきました。加えて、常任理事の先生方には、メーリングリストなどを通じてご助力いただきました。大会開催を支えていただいた皆様、大会に参加していただいた皆様のおかげでこうして大会後記を書かせていただいています。大会にかかわっていただいたすべての皆様に心より感謝申し上げます。最後になりますが、来年度の富山大学での大会も盛会となりますことを、心よりお祈りいたします。

---

---

## ☆☆☆ 第65回大会参加記 ☆☆☆

---

---

### ○ 橋本 剛明 (東京大学)

2018年9月8・9日の二日間にわたり、日本グループ・ダイナミックス学会第65回大会が神戸大学にて開催され、参加しました。今回は、自分の筆頭での発表はなく、その分、関心の赴くままに自由にセッションをみてまわることができました。

グルダイ大会は、規模や発表数の面で、大きな大会とはいえませんが、その分、個々の研究に関して深く、濃い議論をしやすい場だと思います。今大会でも、口頭発表で、個別発表の後に全体ディスカッションの時間が十分にとられており、発表者とオーディエンスのあいだに濃厚なインタラクションが生まれていると感じました。とりわけ、グルダイでは、大学・研究機関・企業など多様な背景の研究者と実務家が、場を同じくするセッションが多く組まれます。問題意識やアプローチが異なるそれぞれの研究について、細かな点まで確認し、実りある意見交換をするのに、グルダイ大会に特有のゆとりある空気感が、良い塩梅で作用しているのだと再認識しました。

また、二日目に催された、大会準備委員会企画のセッションでは、人間心理の文化的な変遷を検討するためにビッグデータを活用する可能性について、浜村武先生が豊富な研究例を交えてト



ークしてくださり、たいへん興味深く拝聴しました。例えば、Google Trends を通して、人々がいつ・どのようなワードを検索しているかを知ることができますが、そこから、社会情勢や文化的変動に応じて人々の関心傾向が変遷する過程を捉えようという試みが紹介されました。ネットが、今や人々にとって、情報のインプットとアウトプットの双方と密接に関わる環境であることはいうまでもないですが、その環境内での特定の「行動」が逐一自動的に記録・蓄積されていく環境でもあります。その環境での人間行動（たとえば「検索」）をどう意味づけるかは重要な課題で、それ自体がひとつのテーマになるようにも思いますが、いずれにせよ、圧倒的にリッチな行動データにアクセスでき、かつそれを活かす方法論が今後発展すれば、従来では解明できなかった問いにアプローチできるだろうという可能性を感じることができました。

大会参加を通じて、自身の研究への刺激を多分に受けられたのは勿論ですが、ポスター会場での立ち話から科研の共同プロジェクトにつながる縁ができたり、懇親会会場からの夜景がとても綺麗だったり、充実した時間を過ごすことができました（どこかでイニ○スタを見かけるかもという淡い期待があったのは内緒です）。末筆ながら、ご多忙のなか大会開催に向けて力を尽くされた準備委員会の先生方と、当日に盤石のサポートで支えてくださったスタッフの皆様に、この場を借りて感謝申し上げます。

## ○ 前田 楓 (安田女子大学)

私にとって第 65 回大会は、はじめての海外旅行のようなものでした。この大会で研究を発表するのだと思うと、大会前から期待と緊張でいっぱいでした。そのせいで、大会当日はあっという間に過ぎてしまい、今となっては発表の直後にこの参加記の執筆をお引き受けしたことすらはっきりと覚えていないくらいなのですが、以下に私の大会参加記を簡単にまとめさせていただきます。

二日間の大会を通して一番強く感じたのは、会場の熱気です。どのセッションにおいても、発表者がしっかりと自分の言葉で研究の魅力を伝え、それに応えるように、フロアの方々も質問や意見、コメントを投げかけていました。「議論が活発になされている」というようなフォーマルな表現では足りない、発表者もフロアの方々も質疑応答の時間を本気で楽しんでいるかのようすに、正直圧倒されました。誤解を恐れずに言えば、フロアの方々の一部の質問は、発表を間近に控えていた私にとって、怖くて仕方がなかったです。（どうしてそんなに怒っているかのように質問をするのか、と感じたほどです。）しかし、一つの研究発表に対して、年齢や所属に関わらず、さまざまな領域を専門とされている方々が真剣に意見を交わしている姿は、とってとても素敵だと感じました。怖さはあるのですが、いつかそうした場の中の一人になりたいという願望も芽生えました。

私自身は、「これからの防災教育に対する教員の意識と学校組織の協働性」という演題で口頭発表をさせていただきました。控えめに見ても、はじめての口頭発表は大失敗というべきで、緊張や焦りから、自分の研究をうまく伝えられなかったことを非常に悔しく感じています。それは、



上記したような雰囲気にもまれてしまったという側面もあるのですが、学会発表の場は、自分自身がやりがいを感じている研究に、客観的かつ貴重なご意見をいただくことのできる数少ない機会だと私は考えます。私自身の関心である防災教育やインクルーシブ教育などに関して、グループ・ダイナミックスの視点からより議論の質を深めたいと考えておりますので、今回の反省を生かし、次こそはしっかりと発表することができるように、また一年しっかりと準備をしたいと思っています。

最後になりましたが、大会運営にご尽力いただいた準備委員会の先生方、スタッフの皆様から御礼を申し上げます。

---

---

## ★★★ コラボ・リクエスト企画を振り返って ★★★

---

---

### ○太刀掛 俊之（日本脱カルト協会／大阪大学）

#### コラボ・リクエスト企画に参加して

貴学会としてはじめての試みであるコラボ・リクエスト企画に発表・参加する機会を戴きました。このポスターセッションでは日本脱カルト協会の活動内容を紹介するとともに、貴会会員の皆さんとコラボレーションの可能性を探るテーマとして、次の4点（1. カルト問題への関心を高め、被害予防の啓発を促進するための研究、2. カルト被害の当事者やその家族に対する社会的支援の研究、3. カルトの集団構造に関する研究、4. 当協会の集団発展に関する研究）を中心に、実践的な内容を交えながら説明を行いました。

当日は6名の大会参加者にお越しいただき、準備していたテーマに基づきながら、いずれも長時間に渡って意見交換を行いました。「自分が取り組むテーマ・専門領域とは異なっているかも」と感じられているものの、いずれも問題の解決に何かしら力になることはないかと関心を持たれた方がお見えになりました。限られた時間の中では研究のアイデアについての具体的な検討までには至りませんでした。今後の展開に期待を持たせるものになったのではないかと考えています。

今回の参加で得られた課題としては、皆さんとコラボレーションを仕掛けるにあたって、カルト問題の実情と取り組みの意義を伝えつつも、取り上げるテーマについて研究の観点から何がどこまで明らかになっているのかをより具体的に、より魅力的に伝えることだと感じました。次回以降も参加する機会を戴けるようでしたら、継続して有意義な意見交換ができればと考えておりますのでどうぞよろしくお願い申し上げます。

## ○ 依藤 佳世 (公益社団法人 国際経済労働研究所 研究員)

### コラボ・リクエスト参加の感想と今後に寄せる期待

今年、約15年ぶりにグループ・ダイナミクス学会に参加させていただきました。学生としての研究発表ではなく、コラボ・リクエスト企画で、共同研究に興味を持ってくれそうな研究者探しに参加しました。当研究所は、労働組合の運動を推進するために、いわばアクション・リサーチを活用しながら進めており、現実問題の解決に貢献することを目標としています。今大会で、当研究所からは2つのプロジェクトの共同研究者を求めて参加し、私は「生涯生活」について報告して、一定の関心を持っていただいたと感じました。今後、このご縁での共同研究の進展とともに、さらに社会心理学を応用した現実問題の解決を志向する研究者が増えてくることを願っています。

個人としては、久しぶりに会った研究者が多く、なかには10年ぶりぐらいにお目にかかった方もいて、お互いに仕事も忙しくしながらも研究を続けていることを知ることができて、改めて研究への意欲を高めました。また学会参加も2年ぶり、研究発表の場にも刺激を受けました。

学生のころは発表したいことの有無にかかわらず、必要だから発表するという、ある種義務的な参加の仕方でしたが、就職してからは、目の前の仕事に追われている中で、それでも知りたい研究や知ってもらいたいことがあり、それが発表への動機になってきたように感じます。そして、発表することで仲間が増えることも学会発表の魅力の1つだと改めて実感しました。今大会では、実際に知り合いになった人が増えたというだけでなく、それまであったつながりを、学会での再会や他の研究者の発表を通じて、思い出すということもありました。そうした意味で、今大会、およびコラボ・リクエスト企画への参加は、研究の発展への種まきになったように思います。引き続き、こうした先進的な取り組みが、グループ・ダイナミクス学会で企画されることにも大いに期待を寄せています。

## ○ 向井 有理子 (公益社団法人 国際経済労働研究所 研究員)

### コラボ・リクエスト企画参加について

これまで、グループ・ダイナミクス学会には自身の研究発表ではお世話になってきたものの、今大会では「コラボ・リクエスト企画」という新しい取り組みということで、どのくらいの方々が興味を持っていただけるのか期待と不安を感じながら参加させていただきました。

当研究所では労働組合の活動のためのシンクタンクとして、様々な共同調査を行ってきました。発表させていただいたテーマの「情報産業労働者の働きがい」は、こうした労働組合との共同調査や議論を行う中で提起されてきた問題です。情報産業は私たちの生活にますます必要不可欠なものとなってきていますが、そこに従事する労働者の問題は十分に顧みられてきたとは言い難い状況です。こうした中、本研究は、情報産業を取り巻く特殊な商慣行や就業形態などを踏まえ、情報産業労働者が抱える問題解決に向けたアクションにつながる研究として、実施していこうとしています。また、この研究は、心理学だけでなく、社会学や経済学といった他の学問分野を含

めて学際的に進める予定でいます。当該産業にかかわる労働組合とも連携し、実際の社会問題の解決へと寄与する知見を示していくことが使命であると考えています。

今回の発表では、「働きがい」に関心の高い研究者の方々を中心に、関心を寄せていただくことができました。ご連絡をいただいた研究者の方とは、是非一緒に研究に取り組んでいきたいと希望しております。また、ご自身の研究分野とは直接かかわりがなくても、かつて情報産業で働いていたことがあるという方々からもお声かけいただきました。そうした方々にも、実際に問題を抱える当事者と一緒に解決に向けて研究を進めるという研究スタイルに、興味を持っていただくきっかけになったのではないかと期待しております。この度の「コラボ・リクエスト企画」を立案・実施していただきました先生方には心より御礼申し上げ、こうした取り組みが継続されていくことを心より願っております。

## ○ 相馬 敏彦 (広島大学)

### 「未だ仲介途上」

この企画の主旨を聞いて、まっさきに思い浮かんだのが、今回紹介した藤田さん（北須磨訪問看護・リハビリセンター所長）と花井さん（神戸市看護大学）だった。彼女らとは、半年くらい前からの付き合い。私が親密な関係での暴力のエスカレートの研究をしていることを知り、ヘルプメールを送ってきて以来、何度か話を聞いていた。「訪問看護師が利用者やその家族から暴力を受けることがある。管理責任者として職員の安全を守りたい、、、でも、看護の質は落としたくない」。いくつかのケースを聞くうちに、暴力がエスカレートする背景にある、複雑で厄介そうなものも垣間見えてきた。訪問看護の利用者には、回復しない自分へのいらだち、迫りくる死への恐れや困惑、（性的欲求含めて）つながりへの希求、いろいろな気持ちがあるようだ。そういった気持ちを、何のオブラートに包むこともなく、時には増幅させながら訪問看護師にぶつける利用者や家族、そしてその心情までも積極的にくみ取り寄り寄り添おうとする看護師。看護師が心情をくみ取ろうとするのは、それがケアの質に関わるからだ。複雑な問題だと思う。「訪問看護師への暴力は何が原因でどうすれば抑制できるのか?」「看護師や施設管理者はどうすべきか?」に対して、当面の答えを示唆するような要素還元主義的なアプローチが求められているのかもしれない。

お二人とも学会でいくつかのコメントをもらえて感謝されていた。何よりも、ポスターを見に来た人から「こんなことを問題にしてけしからん、暴力なんてレアケースだ」などとお説教をくもらうことなく、じっくり話を聞いてもらえたことを喜んでおられた。できればこの問題にもっと積極的にコミットしてくれる心理学者を見つけたかったようだった。

まだ間に合います！大会には参加されていなくても、この記事をみて、少しでも関心をもたれた方、何かアイデアが浮かんだ方、統計にお詳しい方（←事情により）、ご近所にお住まいの方、とりあえず以下のアドレスにご連絡ください。おつながります。

souman@hiroshima-u.ac.jp

## 選考経過と結果の報告

機関誌編集担当常任理事  
三浦麻子 (関西学院大学)

本年度の優秀論文賞の選考対象論文は、実験社会心理学研究第 57 巻 1 号及び 2 号に掲載された原著論文 9 編、資料論文 2 編の計 11 編でした。7 月 9 日に審査対象論文の著者 2 名を除く編集委員全員に選考依頼を行い、優秀と考えられる論文 3 編を選び、1 位から 3 位まで順位をつけて、8 月 31 日を締め切りとして投票をお願いしました。19 名の編集委員から投票が届き、規程に従って、1 位票に 3 点、2 位票に 2 点、3 位票に 1 点を与えて集計しました。その結果を参考資料として、9 月 7 日に優秀論文選考委員会を開催して協議した結果、以下の 2 編に今年度の本学会優秀論文賞を授与することを決定しました。

岩谷舟真・村本由紀子

「多元的無知の先行因についての検討—他者の選好推測に注目して—」(第 57 巻 1 号所収)

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjesp/57/1/57\\_1602/article-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjesp/57/1/57_1602/article-char/ja)

坂本剛・野波寛・蘇米雅・ハス額尔敦・大友章司・田代豊

「資源管理における行政への協力意図に関する地域と都市の住民比較:  
内モンゴルの草原管理を事例として」(第 57 巻 1 号所収)

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjesp/57/1/57\\_1606/article-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjesp/57/1/57_1606/article-char/ja)

## 受賞者の声

岩谷舟真・村本由紀子 (2017)

多元的無知の先行因についての検討—他者の選好推測に注目して—  
(第 57 巻 1 号所収)

この度は歴史あるグループ・ダイナミクス学会から優秀論文賞を賜り、とても嬉しく思います。過去の受賞者の先生方の名前を拝見し、ここで満足するのではなく今後も継続して更に研究に努めていかねばと改めて思った次第です。

本論文のテーマは多元的無知であり、人々が規範に従いたくないと思いつつも規範に従ってしまうのは何故だろうということを検討しました。具体的には、他の人も嫌々規範に従っている

(行動と選好にギャップがある) のだから、自分も規範に従わなければならない、という一連のプロセスについて調査と実験の手法で検討いたしました。

言葉にすると簡単ですが、実験実施・論文執筆までは2つの大きな関門がありました。1つ目の関門は、研究テーマの決定です。本研究は私が修士2年のときに行った研究ですが、それまでの修士1年の間は全くといってよいほど研究が進んでいませんでした。卒論で行った実験を深めることを諦めかけ、

色々な研究に手を出そうとしては取り下げ、結果何も進まないというスランプ気味の1年を乗り越えた末に行われたのが本研究でした。振り返ると研究テーマ自体は学部から変わっておらず、自分のしたい研究を継続してできている状態ですが、このことは共著者であり指導教員である村本先生にうまく導いて頂いた結果であると思っています。

2つ目の関門は、従いたくない規範を実験室内に作成することです。先行研究では、酢の入ったワインを高く評定するということが、規範とされていました。しかし、学部生にワインを飲ませるわけないはいかないので、代替物を作成する必要があります。硬水はそれを好む人がいるので、従いたくない規範としてはふさわしくない。酢入りの水は明らかに不味いので、それを高く評定するという規範は不自然。確かに不味いけれども、それを高く評価する人もいるだろう…と実験参加者が思えるような刺激を見つけることに難航しました。最終的には気の抜けた炭酸水を実験に用いました。ここまで考える時点でも苦労しましたが、1人実験室で炭酸水を振るという作業をしているときは肉体的にも大変で、かつ精神的にもやや虚しい気持ちになる作業でした。1つ目の関門とはまた違った難しさがありました。

以上、2つの関門を乗り越えての受賞ですので非常に嬉しく思います。今後はこの賞の名に恥じぬよう、さらに研究を進めていきたいと思っています。最後になりましたが、分量が多く実験も非常に複雑である本論文を審査して下さった査読者の皆様、そして選考して下さった選考委員の皆様へ感謝いたします。ありがとうございました。

**コメント：岩谷舟真 (東京大学)**

坂本 剛・野波 寛・蘇米雅・ハズネル敦・大友 章司・田代 豊 (2017)

資源管理における行政への協力意図に関する地域と都市の住民比較：

内モンゴルの草原管理を事例として

(第57巻1号所収)

この度は、伝統ある日本グループ・ダイナミックス学会の優秀論文賞を賜り、大変光栄に思います。本論文の投稿にあたって、ご指摘を下された審査者の先生方、ならびに本論文を推薦して下さった選考委員の先生方に深くお礼を申し上げます。本論文の調査は野波寛先生を中心とする研究グループの共同研究として実施されました。研究遂行にあたって野波先生、大友章司先生、



そして田代豊先生とたくさんの議論をさせていただきました。また蘇米雅先生とハズネル敦先生には、調査フィールドの調整のご協力だけでなく、幾度となく有益なコメントをいただきました。ここに感謝の意を表します。一連の調査の結果はグループ・ダイナミクス学会の他に社会心理学会と環境心理学会でも学会発表をさせていただき、多くの先生方から鋭いご指摘を頂戴し、試行錯誤を行う中で本論文の執筆に至ることができました。学会という制度に研究を育てていただいていることを改めて実感いたします。本当にありがとうございました。



本論文は、中国の内モンゴルにて、行政による草原管理への関与がどのような観点から評価されるのか、牧畜村の住民と都市部住民間で比較をしたものでした。調査対象地の牧畜村には2011年から断続的に訪問させていただきましたが、本論文の調査はそのうち2012年7月に調査員兼ドライバー達と田舎道を走りまわり、各戸を訪問して聞き取りを行ったものです。フィールドを一緒にした野波先生と、汗をかきながらデータを集めました。家畜の世話で忙しい中、調査に協力をしてくださった皆様に本当に心からお礼を申し上げたいと思います。家々でいただいた内モンゴル式の塩味のミルクティーには身も心も癒されました。

7月の内モンゴルの草原と沙漠、オアシスの風景は、エキゾチックな古い物語に出てくるような、既視感さえ覚える美しさです。しかし5年程度のフィールド通いの間にも、地域の湖が減退し、各集落に空き家が増え、そして政府による管理政策の変遷もありました。地域にはそうした環境の変化に適応していこうと新たな牧畜スタイルを模索する世帯もあります。これからも地域の新たな世代が、草原を引き継いで、誇りを持って内モンゴルの牧畜に取り組めることと、それらが全体として持続可能な取り組みになることを心から願ってやみません。私たちの研究からお役に立てるところがあればそれ以上に嬉しいことはありません。

改めまして、このような素晴らしい賞を賜り、重ねてお礼申し上げます。今回このような賞をいただけたのは、審査の労をとってくださった先生方、共著者の先生方の他に、研究が遅々として進まないときもあたたかく励まし続けてくださった名古屋大学の恩師・吉田俊和先生をはじめ研究指導会の皆様のお蔭です。皆様から頂いたご指導は私の生涯の財産です。

今後とも、心理学理論への貢献とフィールドへの還元可能性の両方を探求して参ります。これからも学会や研究会等でお会いさせていただき皆様からのご指導・ご鞭撻を賜れますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

**コメント：坂本剛（名古屋産業大学）**

## 選考結果の報告

2018 年度優秀学会発表賞選考委員長  
有倉巳幸（鹿児島大学）

2018 年 9 月 8 日、9 日に神戸大学で開催された日本グループ・ダイナミックス学会第 65 回大会において、「2018 年度優秀学会発表賞」の選考が行われました。

審査過程につきましては、つぎのとおりです。論文集原稿を対象とした事前審査は、部門ごとに理事全員による投票（一人 1 票）が行われ、各部門上位 3 名（3 発表）が選出されます。その上で、当日に行われる二次審査では、理事を中心に選出された 3 名の審査者がそれぞれの発表を聴き、内容とプレゼンテーションを各 5 点で採点します。最終的に、一次審査の投票数（1 票を 1 点とカウント）と二次審査の採点を加算する方法で決定します。

論文集原稿を対象とした事前審査と、大会時の発表を対象とした当日審査の結果、今年度の同賞は、以下の発表における第一発表者の方々に授与されることが決定いたしました（敬称略）。なお、今年度は、ポスター発表は 1 位が同点で 2 名おられましたので、常任理事会の審議の結果、両名の方に優秀学会発表賞を授与することになりました。

### < ロング・スピーチ部門 >

- 第一発表者： 李勇昕（京都大学防災研究所）
- 発表題目： 被災地と未災地のインターローカリティ
- 共同発表者： 矢守克也（京都大学防災研究所）

### < ショート・スピーチ部門 >

- 第一発表者： 大門大朗（大阪大学大学院人間科学研究科、日本学術振興会、  
デラウェア大学災害研究センター）
- 発表題目： 災害ボランティアと組織化のための戦略
- 共同発表者： 渥美公秀（大阪大学大学院人間科学研究科）

### < English Session 部門 >

- 第一発表者： Gherghel Claudia（名古屋大学、日本学術振興会）
- 発表題目： Culture, Moral Discourse and Motivation to Perform Kind Acts
- 共同発表者： Hashimoto Takeshi（静岡大学）、Takai Jiro（名古屋大学）、  
Nastas Dorin（Alexandru Ioan Cuza University of Iasi）

### < ポスター発表部門 >

- 第一発表者： 谷辺哲史（東京大学大学院人文社会系研究科、日本学術振興会）
- 発表題目： 集団の実体性が集団への心の帰属に与える影響

- 共同発表者： 橋本剛明（東京大学大学院人文社会系研究科）、苜米地飛（東京大学文学部）、  
正本拓（東京大学大学院人文社会系研究科）、  
唐沢かおり（東京大学大学院人文社会系研究科）
- 第一発表者： 木村真利子（立正大学大学院 心理学研究科）
- 発表題目： 金融機関における特殊詐欺対策に関する心理学的検討（4）  
被害の判断基準に関する自由記述の分析
- 共同発表者： 西田公昭（立正大学 心理学部）

受賞者の皆様、おめでとうございます。受賞者には後日、郵送にて賞状が授与されます。

受賞者は、受賞した内容に関する論文を第一著者として『実験社会心理学研究』に優先的に投稿する権利を有し、「特集論文」に準じて主査および副査1名で審査を受けることができます。ただし、投稿の権利は受賞発表日（本日）から1年間に限って有効です。

なお、選考経過の詳細については、後日ニュースレター（ぐるだいニュース）にてご報告させていただきます。

## 受賞者の声

### <ロング・スピーチ部門>

李勇昕・矢守克也

被災地と未災地のインターローカリティ

このたびは、名誉ある賞をいただき、誠に光栄に思います。ご多忙の中選考して下さった先生方、関係者の皆様に心から感謝を申し上げます。

本発表は、アクションリサーチを通じて、東日本大震災の「被災地」である茨城県大洗町と南海トラフの「未災地」である高知県黒潮町という2つの地域の交流により、どのようなインターローカリティが生まれたのかを解明することです。具体的には、2018年5月26日と27日に大洗町で、「被災地—未災地」の交流勉強会を主催することです。

今回の交流勉強会の特徴は2つがあります。1つ目は、2つのローカルな場が結びつき、インターローカルな関係が生まれたことです。2つ目は、それぞれのローカルな場所から発信したメッセージが、研究者あるいはマスメディアといった外部者ではなく、当事者自身がつくったものであったことです。大洗町と黒潮町、この二つの地域の出会いにおいては、「目指す未来」と「経験してきた過去」が交錯しています。「未災地」である黒潮町が目指している「災害が来ても『犠牲



者ゼロ」の未来」は、大洗町がかつて東日本大震災を経験した際に実現したの「犠牲者ゼロ」という過去と重なります。一方、大洗町が目指す、防潮堤頼みでない「住民主体の避難体制づくりの未来」は、黒潮町がすでに歩んできた過去なのです。このような交錯はまた、それぞれの未知の未来への疑問や課題に具体的な答えを与えます。これらの答えは、インターローカリティの発展につながります。たとえば、黒潮町の「砂浜美術館」から大洗町で「砂浜図書館」をつくる発想、黒潮町の缶詰工場、T シャツ展と『ガールズ&パンツァー』とのコラボの計画、そして大洗町の避難カルテづくり、防災思想づくり…などがあります。そして、インターローカリティは、この2つの地域に限定されることなく、全国にメッセージを発信できます。

本受賞および先生方のコメントを励みとして、フィールドワークを重ね、インターローカリティをより丁寧に解明できるよう、引き続き頑張っていきたいと存じます。大洗町の皆様、黒潮町の皆様、矢守研究室の皆様に、この場を借りまして、改めて感謝を申し上げます。

コメント：李勇昕（京都大学）

### <ショート・スピーチ部門>

#### 大門大朗・渥美公秀 災害ボランティアと組織化のための戦略

この度は、大変名誉ある学会発表賞を賜り、ありがとうございます。選考いただきました先生方、また、発表の際にご質問、ご意見いただきました先生方に心より感謝申し上げます。

今日すでに問題として共有されているように、災害直後に発生する支援の問題の多くは、その配分・分配にあると言えます。救援物資の偏りや、要不要の物品の仕分け、体育館にうず高く積まれた支援物資…それは、ボランティアにおいても同様です。実際、熊本地震後、メディアの影響もあり、多くの団体が熊本市、益城町、阿蘇市に駆けつけました。しかし、その一方で、同じ熊本県でも、西原村や南阿蘇村は地域と比べ大きく取り上げられず、支援の必要性に対して、実際の支援が十分でないという状況が生まれました。

こうした支援の不十分さに対して、本研究は、熊本地震後のボランティア団体の動きに着目し、2つの志向があることを整理しました。1つ目は、ヒエラルキー志向と呼ぶ向きです。これは、JVOAD や Japan Platform に代表されるような団体間のネットワーク組織の設立の方向と近いもので、「連携」が一つのキーワードです。つまり、他地域の状況やそこで活動する団体を適切に把握することで、偏りやムラのない支援を実現していこうというものです。そして、2つ目は、アナーキー志向と呼ぶ向きです。この志向は、ヒエラルキー化とは距離を取りながら、誰も支援に行かないところ、支援が抜け漏れたところへ、敢えて行こうとするものです。そこでは、合理性や効率というよりも、「寄り添う」ということが一つのキーワードと言えます。



しかし、本研究の特色は、この2つの志向を整理しただけでなく、その2つが構造的に生み出す空隙について指摘した点にあると言えます。まず、ヒエラルキー志向の問題は、広く情報を共有し、適切に支援を配分するという理念にもかかわらず、熊本地震のような大災害において、迅速かつ柔軟な対応を阻害し、時には最大公約数的な支援へと向かってしまったということです。次に、アナーキー志向には、即興的で柔軟な対応を行う利点があるものの、敢えてヒエラルキー志向と距離を取ってしまったということです。つまり、ここには、現場から遊離するヒエラルキー志向と、ヒエラルキー志向とは距離をとったアナーキー志向によって、構造的に取り残された領域ができてしまうということです。ヒエラルキー志向からは縦に遊離し、アナーキー志向からは横に遊離していく地域こそが、最も被害の大きかった益城町のような地域だったということです。

「ボランティア元年」と呼ばれた1995年の阪神・淡路大震災から20年以上が経ち、敵対性ではなく、協調性に特徴づけられる災害ボランティアや新しい社会運動がいわば「社会化」「脱政治化」しているのではないのでしょうか。災害復興を被災された方々とともに作り上げていく上で、忘れられた政治性をもう一度引受けることが研究者に求められているのではないのでしょうか。

コメント：大門大朗 (大阪大学)

#### < English Session 部門 >

Gherghel Claudia, Hashimoto Takeshi, Takai Jiro, Nastas Dorin  
Culture, Moral Discourse and Motivation to Perform Kind Acts

このような名誉のある賞をいただき、光栄に思っております。ご選考くださった先生方や発表を聞きにいらっしゃった先生方、発表に対して貴重なコメントをくださった先生方に心から感謝を申し上げます。

本研究では、他者への親切行動を行う動機づけが行為者のウェル・ビーイングにどのような影響を与えるのかを検討するために三ヶ国比較を試みました。他の人に親切な行動を行うことによって、相手の喜びに貢献できるようになるだけではなく、自分のこころも豊になると古くから信じられています。それでは、なぜ人々はもっと親切行動をしないのでしょうか。これを疑問に思った私は親切行動の意味合い、文化的背景や道徳的な位置づけを考えるようになり、本研究に取り組み始めました。

まずは、親切行動が必ずしも行為者のウェル・ビーイング向上につながるわけではないことは自己決定動機づけ理論の観点から示唆を得ることができます。他者の目が気になったからや、社会的な圧力を感じたからというような外的な理由によって動機づけられた親切行動は行為者のウェル・ビーイングを高めないことが示されています (Weinstein & Ryan, 2010)。一方で、外的な理由をより内在化しているラテンアメリカ人やインド人の人々は外的に動機づけられた親切行動を行っても、高いポジティブ感情を経験することを示す研究もあります (Janoff-Bullman &



Legatt, 2002; Miller et al., 2011)。それは西洋人に比べて、義務に基づいた道徳的な価値観をより内在化しているからであると考えられています (Miller, 2004)。

ウェル・ビーイングに対する親切行動実行の効果が親切行動を行う動機づけのタイプによって異なるのかを検討するために、義務に基づいた道徳的な価値観の異なる三ヵ国（日本、ルーマニア、アメリカ）を比較しました。その結果として、どの国においても、内的動機づけ（親切行動を行う意欲）が親切行動後に経験するであろうポジティブ感情を予測しました。しかし、外的な動機づけ（親切行動を行う義務）は、日本においてのみポジティブ感情を予測しました。さらに、社会のしきたりや伝統を道徳的な基盤として位置づけるコミュニティ倫理の賛同が親切行動を行う外的な動機づけを予測したという結果から、動機づけの背景にはモラルティーディスコースがあることがいえます。本研究知見は、文化、道徳に対する考え方や動機づけの種類が親切行動のウェル・ビーイング促進効果を左右する要因であることを示唆しています。

研究、発表ともに至らない点が多くあったにも関わらず、このような有難い評価をいただきましたことは、これからの研究をもっと頑張ろうと思える励みとなりました。最後になりますが、多くの方々のご協力がなければ、この研究を実施することは不可能であったと感じております。ご指導くださった高井次郎先生（名古屋大学）、橋本剛先生（静岡大学）、Nastas Dorin 先生（Alexandru Ioan Cuza University of Iasi, Romania）、アメリカでのデータ収集を可能にくださった Cargile Aaron 先生（University of California, Santa Barbara）、研究マテリアルの日本語訳をご確認くださった赤松大輔さん（名古屋大学）、発表原稿に対して貴重なご助言をくださった徐文臻さんや調査にご協力くださった日本人、ルーマニア人、アメリカ人の学生の皆様に、ここに記してお礼を申し上げます。

コメント: Gherghel Claudia (名古屋大学)

#### <ポスター部門>

谷辺哲史・橋本剛明・苫米地飛・正本拓・唐沢かおり  
集団の実体性が集団への心の帰属に与える影響

このたびは名誉ある賞を頂き、大変光栄に存じます。選考委員の先生方、学会会場にて貴重なコメントを下された皆様にご心よりお礼申し上げます。

本研究は、集団に対して人間のような心が帰属されるという現象を、「心がある-ない」の1次元ではなく、主体性 (Agency) / 経験性 (Experience) という2次元に分けて検討したものです。先行研究では、集団の実体性が高くなると集団に心があるように感じられ、同時に集団内の個人への心の帰属が割り引かれるというトレードオフの関係があるとされていました。先行研究では心の帰属を1次元で測定していたのですが、私たちの研究ではこれを主体性（意図や思考といった、行動を引き起こす心の働き）と経験性（感覚や感情を経験する心の働き）に分けるこ



とで、①実体性の高い集団は主体性・経験性ともに高く帰属され、②実体性の高い集団の成員は主体性の帰属を割り引かれるが、③集団成員の経験性は実体性に関わらず高く帰属されることを明らかにしました。

心の帰属は責任帰属などの道徳判断と関連すると言われており、人々が集団の心をどのようなものとして知覚しているかを知ることは、不祥事企業に対する不買運動や民族紛争といった集団が関わる現象の理解につながると考えられます。本研究では「心があると思う」という知覚の検討にとどまっていますが、この知覚が集団に対する行動にどう影響するかを解明することが今後の課題であると考えています。

学会当日の発表では、「集団の心」という雲をつかむようなテーマの上に、主体性／経験性という耳慣れない用語まで出てきて、発表を見に来てくださった皆様には大変な認知負荷をかけてしまいました。しかし、私の説明が拙い部分をうまく汲み取っていただき、説明を補ったり、わかりやすい言い換えをしてくださったりと、皆様の助けを借りることで何とか発表を成立させることができました。そして、そうしたやり取りを通じて私自身もこの研究の意味をより深く理解することができました。この場を借りて感謝申し上げます。今回の受賞を励みに今後も研究を進めて参りますので、引き続きご指導を賜りますようお願いいたします。このたびは誠にありがとうございました。

コメント：谷部哲史 (東京大学)

木村真利子・西田公昭

金融機関における特殊詐欺対策に関する心理学的検討（４）  
被害の判断基準に関する自由記述の分析一

この度はこのような名誉ある賞を頂き、大変うれしく思います。審査をしてくださった先生方、貴重なご指摘をいただきました先生方に、心より感謝申し上げます。

本発表は、金融機関において特殊詐欺対策の一環として行われている、顧客への声掛け活動に関するものでした。金融機関では、窓口で現金引き出しに訪れた顧客に声掛けをして、会話の中で詐欺被害の可能性を判断し、被害を食い止めてきました。詐欺被害者は窓口での受け答えで虚偽の回答をすることが多く、職員は顧客の嘘を短時間で見抜くことを求められています。今回の研究では、金融機関職員への調査を実施し、声掛けの中でどのような手がかりから「あやしい」と判断しているのかを自由記述回答から検討しました。多くの職員が言及した手がかりとしては、話が二転三転するなどといった話の「不整合」や、「焦り」の様子があげられており、特に「不整合」は被害防止に成功した職員で多く、半数近い方が言及しています。また、被害防止経験の多い職員では、多数の手がかりから総合的に不自然さを感知している可能性が示唆される結果も得られました。



ポスター発表の会場においては、多くの先生方から、結果の解釈や課題などについて様々な貴重なご指摘を頂き、またはっとさせられるようなご質問も頂きました。今後この研究をさらに進めていく上では、頂いたご指摘・ご質問を最大限に生かして参りたいと思います。会場でお話させて頂いた先生方には、改めてこの場で、感謝を申し上げます。そして最後になりますが、日頃よりご指導頂いている西田公昭先生や、調査にご協力下さった金融機関の皆様、その他この研究にご協力くださったすべての皆様に、この場を借りて厚く御礼申し上げたいと思います。

コメント：木村真利子（立正大学）

## ★★★ 国際学会大会参加記 ★★★

### ○ 井奥 智大（大阪大学）

この度は、国際学会発表支援制度によりご支援頂き、誠にありがとうございます。2018年7月18日から21日までアメリカのワシントンDCで開催された2018 INGRroup（Interdisciplinary network for group research）学会に参加してまいりました。発表内容はリーダーシップと集団の創造性の関係に関する研究でした。INGRroupは、その名の通り、産業組織心理学や経営学といった複数の学問分野の集団研究者による研究発表の場となっています。ここでは、当学会での研究発表と、参加した「Hackman-athon」というセッションの2点について報告致します。

研究発表について、抄録審査から当学会での発表を通じ、研究内容を精緻化することができました。まず、口頭発表の抄録審査では、2名のレビュワーからのフィードバックが得られました。当学会の抄録は1500字から3000字まで書くことができ、問題から考察まで詳細なフィードバックを得ることができます。それらの中でも、本研究が提唱する概念に関する指摘は具体的であり、概念を明確化することに繋がりました。また、この指摘を受けて再検討した上で臨んだ口頭発表では、提唱する概念と関係する他の概念など、さらに建設的な助言をさまざまな分野の研究者から得ることができました。私は、これまでリーダーシップ研究や創造性研究の論文を中心に読んできましたが、本学会を通してより広範な研究分野からリーダーシップと集団の創造性の関係について考えられるようになりました。

Hackman-athon のセッションでは、人種も分野も異なる他者との集団討議を実際に体感する機会を得ることができました。Hackman-athon とは、“a competitive interdisciplinary team event that aims to provide solutions to a specific focus problem or question” と定義されています。つまり、学際的な集団が課題の解決案を競うセッションです。各集団は、プレカンファレンスの日から三日間かけて、課



題に取り組み、最終日に解決案を発表します。2018年度の課題テーマは”Managing Violence Against First Responder Teams”でした。欧米の救急医療現場では医療隊員や消防隊員への暴行事件が大きな問題と認識されつつあります。しかし、現状では十分な対応がなされているとは言えません。そこで、この問題に対する解決案を考えることが課題でした。私のグループは、オランダやアメリカといった国籍も違えば、心理学や組織行動学といった学問分野も違う、ダイバーシティのあるグループでした。このようなグループでの活動体験は、これまで経験したことのないものであり、今後リーダーシップと集団の創造性の関係に影響を与える文脈を検討する上で、直接的または間接的に私の研究に寄与するものと思われます。

以上、2018 INGRoupでの活動について述べてきましたが、今後は今回の経験を活かし、より一層研究に邁進していく所存です。最後に、大会参加にあたってご支援を賜りました日本グループ・ダイナミクス学会のみなさま、審査いただいた先生方など、関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。この度はご支援をいただき、誠にありがとうございました。

## ○ 林 亦中 (大阪大学)

この度、国際学会発表支援制度のご支援をいただき、2018年10月2日から4日までオーストラリアのシドニーで開催された Integrate Disaster Risk Management2018 (IDRiM) に参加させていただきました。

私にとっては、初めての海外での国際学会で、さらに、南半球への旅もこれまでなかったため、とてもワクワクしました。台風で、30日に出発するはずの便がキャンセルされたため、私は、翌日の便でシドニーに向かいました。日本ではまだ荒れ模様でしたが、シドニーで、私たちを出迎えてくれたのは清々しいお天気でした。

南半球のため天候は日本とは逆になるはずだと思いましたが、シドニーの早春と日本の早春との間に大きな違いはありませんでした。青い空と暖かい気温という良いお天気が人生初めての国際学会の幕を開いてくれました。短い3日間で私は、New South Wales 大学で世界各地からきている研究者と有意義な時間を過ごしました。英語で、日本語で、中国語で様々なコメントと知的な刺激をいただきました。濃い議論ができたことで貴重な体験となりました。

私は、「体験型防災学習イベント『のだもん』に関する実践的研究」を研究テーマとして口頭発表とポスター発表に参加しました。研究では、今までの第一世代防災と第二世代防災の経験と特徴を踏まえ、第三世代防災の可能性とあり方を「のだもん」という子供向けの地域学習ゲームを



通じて明らかにしようと考えています。議論を通じて、それぞれの国の事情によって防災教育のあり方も異なってくることを感じることができました。さらに、自分の研究が今存在している問題点とこれからの課題がまだ数多くあることを痛感しました。それは、このような国際学会に参加してこそ得られることだと強く感じています。

今回の学会で得られた貴重な意見を生かし、より質の高い研究を目指していきたいと思えます。次回の学会で今回の足りていないところを補ってから「リベンジ」していきたいです。末筆ではございますが、このような機会をいただいた日本グループ・ダイナミックス学会に心より御礼申し上げます。この度はご支援いただき、誠にありがとうございました。

## 国際学会発表支援制度について

2016年度から日本国外で開催される国際学会での発表支援を行う形に改正いたしました。アジア社会心理学会だけではなく、他の国際学会での発表に対する支援を毎年度実施しております。

今年度は選考委員会による審査の結果、8名の会員に対して総額295,000円の支援を行いました。審査に想定以上の時間を要する結果となり、応募者の方々にご迷惑をおかけしたことをここにお詫び申し上げます。申し訳ありませんでした。

渉外担当常任理事として、国際学会発表支援制度の運用に計4年間携わらせていただきました。個人的な考えではありますが、この制度には次の良さがあるように思っております。

(1) 申請締め切り時点で発表予定のものだけではなく、当該年度にすでに発表したものも支援対象となります。

⇒事実、今年度の採用者については両方のケースが含まれています。学会の予算の都合上、おひとりあたりの支援額は少なくなってしまうますが、“ある”に越したことはないように思います。中島自身、学生のときはお金に苦労しました…“あった”ことの良さを感じております。

(2) 他学会の支援制度や所属大学での支援制度等との重複受給も、グルダイ学会側の規定では可能です。

⇒詳細については会則やHP情報を確認していただきたいのですが、当該制度では他の支援との重複受給を阻むものではありません。関連する制度の会則を併せてご確認いただき、“もっとある”形にするのはいかがでしょうか。

(3) 大学院生だけではなく、(会則の規定の範囲内で)若手の研究者のみならずも支援対象となっております。

⇒グルダイ学会は会員のみならずを大事にします。大学院生の方々も若手の研究者の方々も、それ以外のみならずもです。繰り返しの応募も認められていますので、大学院生から若手の研究者に変わられた方も応募可能です。

(4) 受賞歴や賞罰等に、採用者として記載していただくこともできます。

⇒「履歴書や自身のHPにあまり書くことがないなあ」と悩まれている方、ぜひ国際学会発表支援制度に応募することをご検討ください。繰り返しになりますが、この制度は選考委員会

による審査を経て、採用者や助成金額を決定しております。受賞歴や賞罰に該当するものと捉えて差し支えないと思います。

これらの良さを汲み取っていただけたのだと思います（し、某海外学会発表の締め切り直後に、会員 ML で再度周知したおかげかもしれません）が、今年度は例年よりも多くの応募がありました。担当常任理事としてとても嬉しかったです。助成金額が“ある”程度になってしまい、また採用通知が予定よりも大幅に遅れてしまったことは申し訳なく思っておりますが、来年度以降もぜひ多くの会員のみなさまが応募して下さることを願っております。この記事を読んでいたき、「来年度、応募しようかな」と考えてくださった方がいらっしゃると信じて、少し…かなり早いですが締め切りの連絡をいたします。来年度の申請締め切りは7月31日（水）です。皆さまからの応募をお待ちしております。

学会 HP: <http://www.groupdynamics.gr.jp/support.html>

渉外担当常任理事 中島健一郎（広島大学）

---

---

### ★★★ 事務局からのお知らせ ★★★

---

---

#### 実験社会心理学研究 掲載予定論文

- 11/14 現在早期公開済

##### <原著論文>

- 李勇昕・宮本匠・矢守克也

当事者研究からみる住民主体の震災復興  
—防災ゲーム「クロスロード：大洗編」の実践を通じて—

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjesp/advpub/0/advpub\\_1608/article-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjesp/advpub/0/advpub_1608/article-char/ja)

##### <原著 (特集)>

- 杉山高志・矢守克也

津波避難訓練支援アプリ「逃げトレ」の開発と社会実装  
—コミットメントとコンティンジェンシーの相乗作用—

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjesp/advpub/0/advpub\\_si4-6/article-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjesp/advpub/0/advpub_si4-6/article-char/ja)

- 藤原健・伊藤雄一・高嶋和毅・續毅海・増山昌樹・尾上孝雄

演奏者の重心移動を用いた演奏連携度の取得と演奏に対する評価

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjesp/advpub/0/advpub\\_si4-4/article-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjesp/advpub/0/advpub_si4-4/article-char/ja)

- 須山巨基・山田順子・瀧本彩加

集団力学研究のこれまでとこれから：同調と文化拡散に見る，社会心理学と生物学の融合

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjesp/advpub/0/advpub\\_si4-3/article-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjesp/advpub/0/advpub_si4-3/article-char/ja)

#### <資料論文>

- 笠置遊・大坊郁夫

複数観衆状況における共通特性の自己呈示が個人内適応および対人適応に及ぼす影響

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjesp/advpub/0/advpub\\_1605/article-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjesp/advpub/0/advpub_1605/article-char/ja)

#### <Short Note>

- Mizuka Ohtaka, Kaori Karasawa

Perspective-taking in families based on the social relations model

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjesp/advpub/0/advpub\\_1810/article-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjesp/advpub/0/advpub_1810/article-char/ja)

- Takuhiko Deguchi

Analyzing the spread of rule-breaking behavior, focusing on talking in class, based on decision matrices in a critical mass model with local interaction

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjesp/advpub/0/advpub\\_1808/article-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjesp/advpub/0/advpub_1808/article-char/ja)

- 掲載決定（今後、早期公開予定）

#### <展望（特集）>

- 香川秀太

「未来の社会構造」とアソシエーション，マルチチュード，活動理論：

贈与から創造的交歓へ

#### <資料>

- 上原俊介・森丈弓・中川知宏

親密な関係における怒りの感情表出と効果：生存時間分析による検討

### 次年度大会について

次期大会は富山大学で2019年10月19日（土）・20日（日）に開催されます。黒川光流先生にお世話になりますが、大会準備委員長については次期会長という新しいタイプの準備委員会で行われます。新たな体制で開催されます。

---

---

## ★★★ グルダイ学会関係連絡先 ★★★

---

---

本学会では、事務支局を中西印刷株式会社に開設しております。入退会、住所・所属等変更、会費納入、機関誌等の未着・メールマガジンなどのメール配信先の登録・変更・停止等の連絡先は、事務支局である中西印刷株式会社までご連絡ください。

また、論文投稿先・審査書類送付先も中西印刷株式会社となっております。詳細は下記をご覧ください。各種お問い合わせの具体的な連絡先は以下の通りです。

### 事務支局【入退会、住所・所属等変更、その他お問い合わせ先】

日本グループ・ダイナミックス学会 事務支局  
〒 602-8048 京都市上京区下立売通小川東入る  
中西印刷 (株) 学会フォーラム内  
TEL : 075-415-3661  
FAX : 075-415-3662  
E-mail : jgda@nacoss.com

### 学会運営・対外業務関連

日本グループ・ダイナミックス学会本部事務局  
〒 631-8502 奈良市山陵町 1500  
奈良大学社会学部 西道実 研究室  
TEL : 0742-44-1251 (代表)  
E-mail : sec-general@groupdynamics.gr.jp

### 投稿論文・学会誌編集関連【論文投稿先・審査書類送付先】

日本グループ・ダイナミックス学会 編集事務局  
〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入る  
中西印刷 (株) 営業部編集校正課内  
TEL : 075-441-3155  
FAX : 075-417-2050  
E-mail : jjesp-hen@groupdynamics.gr.jp

### 広報用 Twitter アカウント

お知らせしておりますように、本学会の活動の発信として Twitter のアカウントを本学会の広報用として 2017 年 8 月より運用しております。

[https://twitter.com/jgda\\_pr](https://twitter.com/jgda_pr)

大会の案内や論文の早期公開の情報など、発信するなどしております。また、2000 年以降の実験社会心理学研究の書誌情報をランダムに日々配信しております。Twitter ご利用の方、また使っ

てみたいとお考えの方、ぜひフォローしていただいて、本学会の広報を多方面にご紹介いただけますと幸いです。

**広報関連【ぐるだいニュースの編集・記事の投稿、メールマガジンへのニュース記事投稿、  
新刊案内や研究会案内等のニュース記事、書評、公募情報など】**

---

〒108-8345 東京都港区三田 2-15-45

慶應義塾大学文学部 杉浦淳吉 研究室（広報担当 常任理事）

※ 鶴子修司（広報補佐員）

E-mail : office@groupdynamics.gr.jp までお送りください。

(マガジンに関するご希望・お問い合わせ等も、同アドレスまでお送りください)

---